日蓮大聖人御書全集

四条金吾殿御返事（しじょうきんごどのごへんじ）

（源遠流長の事（げんおんりゅうちょうのこと））

新版
1614
〜
1617

四条金吾殿御返事（源遠流長の事）

弘安2年（'79）9月15日　58歳　四条金吾

銭一貫文給びて、頼基がまいらせ候とて、法華経の御宝前に申し上げて候。定めて、遠くは教主釈尊ならびに多宝・十方の諸仏、近くは日月の宮殿にわたらせ給うも、御照覧候いぬらん。

さては、人のよにすぐれんとするをば、賢人・聖人とおぼしき人々も皆、そねみ、ねたむことに候。いおうや常の人をや。

漢皇の王昭君をば三千のきさきこれをそねみ、帝釈の九十九億那由他のきさきは憍尸迦をねたむ。前中書王をば、おのの宮の大臣これをねたむ。北野の天神をば、時平のおとどこれをざんそうして流し奉る。

これらをもっておぼしめせ。入道殿の御内は広かりし内なれども、せばくならせ給い、きゅうだちは多くわたらせ給う。内のとしごろの人々あまたわたらせ給えば、池の水すくなくなれば魚さわがしく、秋風立てば鳥こずえをあらそうように候ことに候えば、**いくそばくぞ御内の人々そねみ**

候らんに、度々の仰せをかえし、よりよりの御心にたがわせ給えば、いくそばくのざんげんこそ候らんに、度々の御所領をかえして、今また所領給わらせ給うと云々。これ程の不思議は候わず。これひとえに、「陰徳あれば陽報あり」とは、これなり。我が主に法華経を信じさせまいらせんとおぼしめす御心のふかき故か。

阿闍世王は仏の御怨なりしが、耆婆大臣の御すすめによって法華経を御信じありて代を持ち給う。妙荘厳王は二子の御すすめによって、邪見をひるがえし給う。これま

たしかるべし。貴辺の御すすめによって、今は御心もやわらがせ給いてや候らん。これひとえに貴辺の法華経の御信心のふかき故なり。

「根ふかければ枝さかえ、源遠ければ流れ長し」と申して、一切の経は根あさく流れちかく、法華経は根ふかく源とおし、末代悪世までもつきずさかうべしと天台大師あそばし給えり。この法門につきし人あまた候いしかども、おおやけ・わたくしの大難度々重なり候いしかば、一年二年こそつき候いしが、後々には、皆、あるいはおち、あるい

はかえり矢をいる。あるいは身はおちねども心おち、あるいは心はおちねども身はおちぬ。

釈迦仏は、浄飯王の嫡子、一閻浮提を知行すること八万四千二百一十の大王なり。一閻浮提の諸王、頭をかたぶけん上、御内に召しつかいし人十万億人なりしかども、十九の御年、浄飯王の宮を出でさせ給いて、檀特山に入って十二年、その間、御ともの人五人なり。いわゆる、拘隣と頞鞞と跋提と十力迦葉と拘利太子となり。この五人も、六年と申せしに二人は去りぬ。残りの三人も後の六年にす

て奉って去りぬ。ただ一人残り給いてこそ仏にはならせ給いしか。法華経は、またこれにもすぎて人信じがたかるべし。難信難解これなり。

また仏の在世よりも末法は大難かさなるべし。これをこらえん行者は、我が功徳にはすぐれたること一劫とこそ説かれて候え。

仏滅度して後二千二百三十余年になり候に、月氏一千余年が間、仏法を弘通せる人、伝記にのせてかくれなし。漢土一千年、日本七百年、また目録にのせて候いし

かども、仏のごとく大難に値える人々少なし。我も聖人、我も賢人とは申せども、「況滅度後」の記文に値える人一人も候わず。竜樹菩薩・天台・伝教こそ仏法の大難に値える人々にては候えども、これらも仏説には及ぶことなし。これ即ち、代のあがり、法華経の時に生まれ値わせ給わざる故なり。

今は、時すでに後の五百歳、末法の始めなり。日には五月十五日、月には八月十五夜に似たり。天台・伝教は先に生まれ給えり。今より後は、またのちぐえなり。大陣すでに破

れぬ、余党は物のかずならず。今こそ仏の記しおき給いし後の五百歳、末法の初め、「況滅度後」の時に当たって候えば、仏語むなしからずば、一閻浮提の内に定めて聖人出現して候らん。聖人の出ずるしるしには一閻浮提第一の合戦おこるべしと説かれて候に、すでに合戦も起こって候に、すでに聖人や一閻浮提の内に出でさせ給いて候らん。

きりん出でしかば、孔子を聖人とする。里社なって聖人出で給うこと疑いなし。仏には栴檀の木おいて聖人とする。

麒麟鳴　知生

老子は二五の文を蹈んで聖人とする。末代の法華経の聖人をば何をもってかしるべき。経に云わく、能くこの経を説き、能くこの経を持つの人、則ち如来の使いなり。八巻・一巻・一品・一偈の人、乃至題目を唱うる人、如来の使いなり。始中終すてずして大難をとおす人、如来の使いなり。

日蓮が心は全く如来の使いにはあらず。凡夫なる故なり。ただし、三類の大怨敵にあだまれて二度の流難に値えば、如来の御使いに似たり。心は三毒ふかく、一身凡夫にて候えども、口に南無妙法蓮華経と申せば、如来の使いに

似(に)たり。過去(かこ)を尋(たず)ぬれば、不軽菩薩(ふきょうぼさつ)に似(に)たり。現在(げんざい)をとぶら訪うに、「刀杖瓦石(とうじょうがしゃく)を加(くわ)う」にたがう違ことなし。未来(みらい)は当詣(とうけい)道場(どうじょう)疑(うたが)いなからんか。これをやしなわせ養給う人々(ひとびと)は、あに同居浄土(どうごじょうど)の人(ひと)にあらずや。事多(ことおお)しと申(もう)せども、とどめ止候(そうろう)。心(こころ)をもって計(はか)らせ給(たも)うべし。

稚児所労

ちごのそろう、よくなりたり。悦び候(よろこそうろう)ぞ。また、大進(だいしんの)阿闍梨(あじゃり)の死去(しきょ)のこと、「末代(まつだい)のぎば者婆、いかでか、これにすぐ過べき」と、皆人(みなひとした)舌(した)をふり振候(そうろう)なり。さにて候(そうら)いけるやらん。三位房(さんみぼう)がこと、そう四郎(しろう)がこと、このことはあたかも符契(ふけい)、

符契(ふけい)と申(もう)しあいて候(そうろう)。日蓮(にちれん)が死生(ししょう)をば任(まか)せまいらせて候(そうろう)。全(まった)く他(ほか)の医(くすし)をば用(もち)いまじく候(そうろう)なり。

九月十五日(くがつじゅうごにち)　日蓮(にちれん)　花押(かおう)

四条金吾殿(しじょうきんごどの)